

適正規模・適正配置について

(稲枝学区)

令和8年5月13日
稲枝北小学校将来の学校の在り方協議会

1

■【説明会の趣旨】

- ・本説明会は、現時点で統合や再編が決定していることを報告するものではありません。
- ・稲枝学区の学校が今後どのような姿になる可能性があるのかについて、客観的なデータとともに現状を共有することを目的としています。
- ・「適正規模・適正配置」とは、子どもたちが将来にわたり、より良い教育環境で学ぶための学校規模や配置の在り方を検討する考え方です。
- ・本資料では、背景、現在の状況、将来推計、想定される選択肢の順に整理しています。

彦根市立小中学校 適正規模・適正配置基本方針
～新たな時代に求められる教育活動の充実のための望ましい教育環境の在り方～

《社会全体の構造変化》

- 生成AIなどデジタル技術の発展⇒皆と同じことができること以上に、独自の発想や視点に価値観が置かれる
- 予測困難な時代、労働市場の流動化や就業期間の長期化⇒しなやかに「自らの人生を舵取りできる力」が不可欠
- 少子化に伴う入試による動機づけの変化、学習時間の減少⇒学びの動機づけをアップデートする必要
- 主体的に学びに向き合っていない子どもの増加
- 内なる国際化で人口の多様性が増す

(中央教育審議会 教育課程企画特別部会 論点整理)

【新しい彦根市教育大綱の基本方針】

心を磨き 可能性を引き出す 彦根の教育～主体的に
学びあい、自分らしく輝く未来をつくる～

自立して学び続ける人づくり

共感力のある人づくり

多様な他者と**協働**できる
人づくり

子ども主体の学びへ

- ✓ 子どもたちが自ら課題を発見し、主体的に学び合う探究的な学び
- ✓ 多様な人と協働して目標を実現する経験を積む社会とつながる協働的な学び



こうした教育を進めるために

- 一定規模の児童生徒の集団が確保され多様な他者と協働して学び合う機会を提供
- 経験年数や専門性等、バランスの取れた構成で教職員を適正に配置できる学校規模を維持

2

■【新たな時代に求められる望ましい教育環境】

- ・生成AIなどデジタル技術の発展は社会構造全体に変化をもたらし、将来の予測が困難な時代となっています。
- ・彦根市教育委員会では、新たな時代に求められる教育活動として、「自立」「共感」「協働」をキーワードに、一斉型の授業だけではなく、「子どもたちが自ら課題を発見し、主体的に学び合う探究的な学び」「多様な人と協働して目標を実現する経験を積む社会とつながる協働的な学び」に重点を置いた教育を目指します。
- ・しかしながら、学級の児童生徒数が少ない場合、協働的な学習に制約が生じます。
- ・こうした教育を進めるためには、
 - ◆一定規模の児童生徒の集団が確保され多様な他者と協働して学び合う機会を提供や
 - ◆経験年数や専門性等、バランスの取れた構成で教職員を適正に配置できる学校規模を維持することが不可欠です。

はじめに:なぜ今、学校規模を考えるのか

稲枝学区の児童数は急速に減少しており、一部の学校では「複式学級」の発生が目前に迫っています。

- ✓ 国の標準:全校で「12～18学級」が適正とされています。
- ✓ 稲枝の現状:北小・西小はともに小規模(6学級)で減少傾向です。
- ✓ 直面する課題:複式学級の発生やクラス替え不能な状況の固定化。
- ✓ 検討の方向性:現状維持か統合か、4つの選択肢(統合の場合)を比較します。

■【なぜ今、検討が必要か】

- ・稲枝学区では少子化の影響により児童数の減少が続いており、今後も減少傾向が続く見込みです。
- ・学校規模の縮小は、学級数の減少を招き、教育活動の幅や人間関係の形成に影響を及ぼします。
- ・国は学校全体の規模として12～18学級を標準と示しています。
- ・稲枝北小学校および西小学校は現在6学級であり、標準規模を下回っています。
- ・将来的には複式学級が編制される人数になることが、推計される状況です。
- ・そうなる前に、地域子ども達にとってよりよい教育環境について、地域として方向性を検討する必要があります。

学校の「適正規模」基準



標準規模

12～18学級

(理想的ゾーン / クラス替え可能)



小規模校

11学級以下

【課題・複式学級】

2学年計16人以下で編成

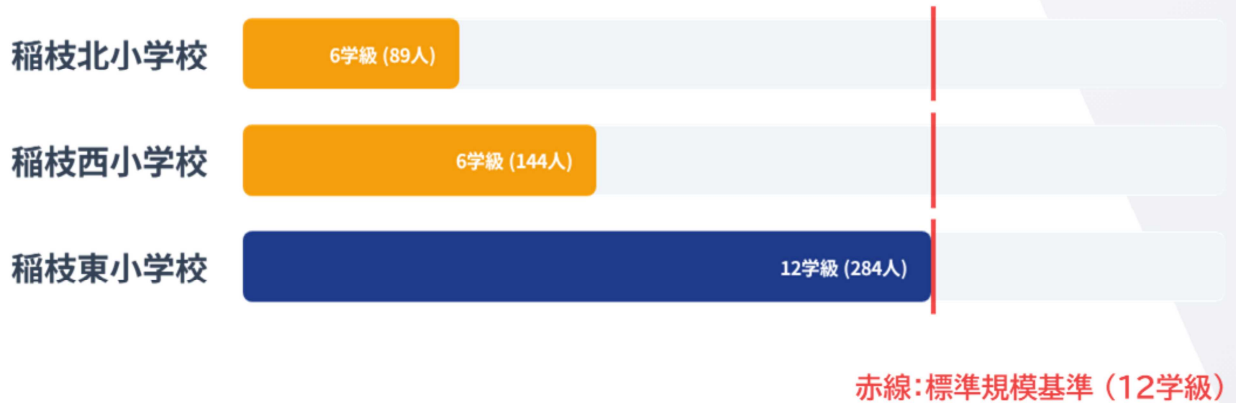
🚶通学に関する基準（距離・時間）

・小学校:概ね 4km以内 / 中学校:概ね 6km以内 / 通学時間:概ね 1時間以内

■【適正規模の考え方】

- ・適正規模とは、学校教育の目的や目標をよりよく実現するための教育環境の基準とするものです。
- ・標準規模(12～18学級)では、複数学級によるクラス替えが可能となり、多様な人間関係の形成が期待できます。
- ・11学級以下は小規模校とされ、単級化や教員配置の制約が生じやすくなります。
- ・小学校では2学年の合計が16人以下となる場合に複式学級が編制される可能性があります。
- ・学校の統合などを検討する際には、通学距離や通学方法も重要な判断材料となります。
- ・通学距離や通学時間については、国が示している目安です。

稲枝学区の現状 ※R7.5.1時点

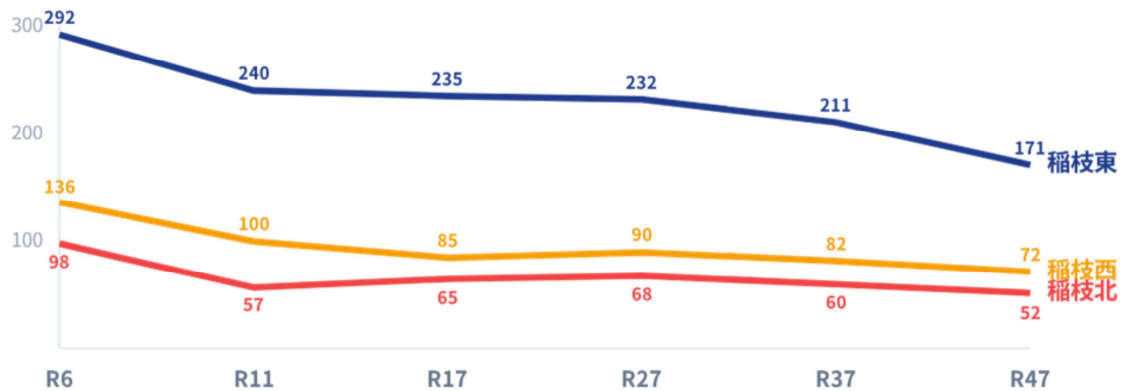


北小と西小は、人数に差がありますが、いずれも「小規模校」です。

■【現在の学級数・児童数(令和7年5月1日時点)】

- ・稲枝北小学校は6学級で児童数は89人です。
- ・稲枝西小学校は6学級で児童数は144人です。
- ・稲枝東小学校は12学級で児童数は284人です。
- ・東小学校は現時点では標準規模に該当しますが、北小学校と西小学校は小規模校です。
- ・同じ6学級でも児童数には差が見られます。

【今後の児童数推移予測（R6～R47） ※R6.5.1時点



■【長期児童数推計（令和6年5月1日時点）】

- ・市の長期推計によれば、今後も学区全体で児童数は減少していく見込みです。
- ・東小学校は292人からR17には235人程度まで、西小学校は136人から85人程度まで、北小学校は98人から65人程度まで減少する見込みです。
- ・今後、一時的に児童数が増えた学年があったとしても、学区全体としての大きな流れは変わらないと考えられます。
- ・時間の経過とともにさらに減少していく可能性が高く、将来を見据えて考えていく必要があります。

R13における児童数見込み（詳細） ※R7.5.1時点

学校名	小1	小2	小3	小4	小5	小6	特支	計
稲枝東小	35	35	32	33	34	44	20	233
稲枝西小	13	9	12	13	19	10	9	85
稲枝北小	8	10	13	3	6	13	7	60

① 稲枝西・稲枝北小学校では、全ての学年で「1クラス20人以下」となる見込みです。

② 稲枝東小学校では、6年生を除き、単級となる見込みです。

■【令和13年(2031年)時点の見込み】

- ・北小学校では1学年が3人や6人といった極めて少人数となる学年が生じる見込みです。
- ・西小学校では1学年が10人未満となる学年が発生すると予測されています。
- ・東小学校でも多くの学年が単級(1学年1学級)となり、6年間クラス替えができない可能性があります。
- ・学級編制基準は、滋賀県では35人とされていて、彦根市も同じ基準です。
- ・今回の推計には転出入などの社会的要因は含まれていませんので、35人付近の学年は、複数学級のままという可能性はあります。

学校規模によるメリット・デメリット

規模区分	メリット	デメリット
小規模校	・個に応じたきめ細かな指導 ・深い人間関係	・人間関係の固定化 ・集団活動の制約 ・多様な考えに触れにくい
標準規模校	・多様な刺激と社会性育成 ・クラス替えが可能 ・活発な行事や教育活動	・個の把握が希薄になる懸念 ・人間関係の希薄化

■【学校規模のメリット・デメリット】

《小規模校》

- ・小規模校では、教員が児童一人ひとりに目を配りやすく、きめ細かな指導が可能です。
- ・一方で、友人関係が固定化しやすく、競争や協働の機会が限定される可能性があります。
- ・体育や音楽などの集団活動に制約が生じる場合があります。

《標準規模校》

- ・標準規模校では、多様な考え方に触れる機会が増え、社会性の育成が期待されます。
- ・クラス替えにより人間関係を広げることが可能です。
- ・一方で、児童数が多いことによる個別対応の難しさが指摘される場合もあります。

児童数減少が招く「複式学級」とは



2学年を1つの教室で編制

小学校において、2つの学年をあわせて「16人以下」になった場合に編制されます。

北小・西小では、今後の児童数推移により、この複式学級が発生する可能性が高まっています。

■【複式学級について】

- ・複式学級は、異なる2学年が同一教室で1人の先生から同時に授業を受ける学級形態です。
- ・2学年の合計が16人以下となる場合に編制される可能性があります。
- ・教員が同時に複数学年をそれぞれ時間を分けて指導するため、半分が自習になるなど、授業時間の配分に制約が生じます。
- ・常に同じ集団で学ぶことにより、人間関係の固定化が進む可能性があります。
- ・北小学校および西小学校では、将来的に発生する可能性が高まっています。

複式学級によるメリット・デメリット、実践例

メリット

- ・リーダーシップ育成: 上級生が下級生を教える機会が増加。
- ・深い人間関係: 異学年交流により兄弟のような絆が醸成。
- ・自学自習の習慣: 間接指導の時間に自ら学ぶ姿勢が定着。

デメリット

- ・直接指導の減少: 教員が1学年に割ける時間が半分に。
- ・学力差のリスク: 自習時間の質により学習定着度に差が出る。
- ・多様な意見の不足: 少人数のため、議論が固定化しやすい。
- ・活動の制約: 体育や合唱など集団活動に限界。

実践例・工夫

- ・ICTの高度活用: タブレットを用いた自学自習や他校との交流。
- ・綿密な指導計画: 指導観を見直し、複式学級にふさわしい授業準備や自主的に学べる体制づくり。
- ・異学年交流の促進: 上級生のリーダー性と下級生のフォロワー性を育み、対象学年以外との関わりの充実。

10

■【複式学級の特徴と対応】

○ メリット

- ・複式学級では、上級生が下級生を教える機会が増え、リーダーシップを育成することができます。
- ・間接指導の時間に自ら学ぶ姿勢が求められ、自学自習の習慣が身につけやすくなります。

× デメリット

- ・一方で、教員が1学年に直接指導できる時間が実質的に半分程度となります。
- ・少人数であるため多様な意見が出にくく、議論や役割が固定化しやすくなります。

★工夫

- ・そのため、タブレット端末を活用した個別最適化学習や綿密な指導計画の作成が重要となります。

将来の統合パターン:4つの選択肢

A案（2校統合）

北+西 → 北小校舎を使用

B案（2校統合）

北+西 → 西小校舎を使用

C案（3校統合）

北+西+東 → 東小校舎を増築

D案（3小+1中統合）

全3小+中 → 中学校敷地に校舎

■【想定される統合案】

- ・A案: 北小学校と西小学校を統合し、北小校舎を活用する案です。
- ・B案: 北小学校と西小学校を統合し、西小校舎を活用する案です。
- ・C案: 3校を統合し、東小学校を増築して活用する案です。
- ・D案: 3小学校と中学校を統合し、中学校の敷地に校舎を建設する案です。
- ・いずれも現時点では方向性を検討するための例示となります。

A案・B案：2校統合案（北・西）

① 計画概要

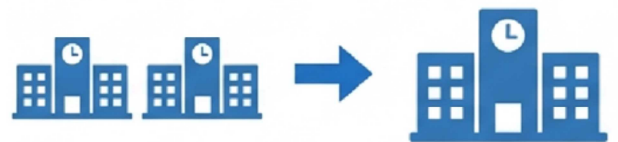
北小または西小校舎を一部改修して活用します。
統合後の規模は10学級、概算コストは約5,000万円を見込みます。

+ メリット

初期投資コストが最小限で済みます。一部の児童を除き、通学距離の変化を抑えられます。

- デメリット（課題）

統合後も標準規模（12学級）に届かず、将来的に再度、統合議論が必要になる可能性があります。



■【A・B案（2校統合）】

- ・改修費は約5,000万円を想定しています。
- ・統合後の学級数は約10学級となる見込みです。
- ・初期費用を抑えられる点が大きな特徴です。
- ・通学距離や生活環境の変化を比較的抑えられます。
- ・標準規模には届かず、将来的に統合についての再検討の可能性が残ります。

C案:3校統合案（東小へ）

① 計画概要

稲枝東小学校を増築・一部改修します。規模は21学級、コストは約7億9,000万円です。

+ メリット

標準規模を確実に確保でき、安定した教育環境（クラス替え可）が長く続きます。多様な友人関係が育まれます。

- デメリット

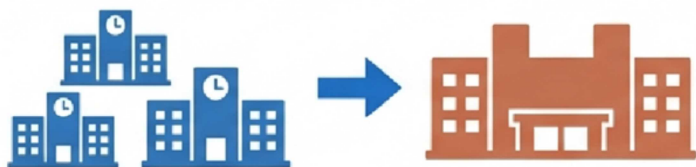
増築等のコストが高くなります。通学距離が増大する児童が増えるため、バス等の支援が不可欠です。



■【C案（3校統合）】

- ・増築費は約7億9,000万円を想定しています。
- ・統合後は約21学級となる見込みです。
- ・標準規模を満たし、長期的に安定した教育環境を確保できます。
- ・北小・西小学区の児童にとっては通学距離が長くなります。

D案:3小学校+1中学校統合案



i 計画概要

中学校敷地に小学校の新校舎を建設。規模は32学級です。

+ メリット

同じ敷地内であることで、9年間の連続性ある教育とスケールメリットを最大化し、教育的効果を最大化できます。

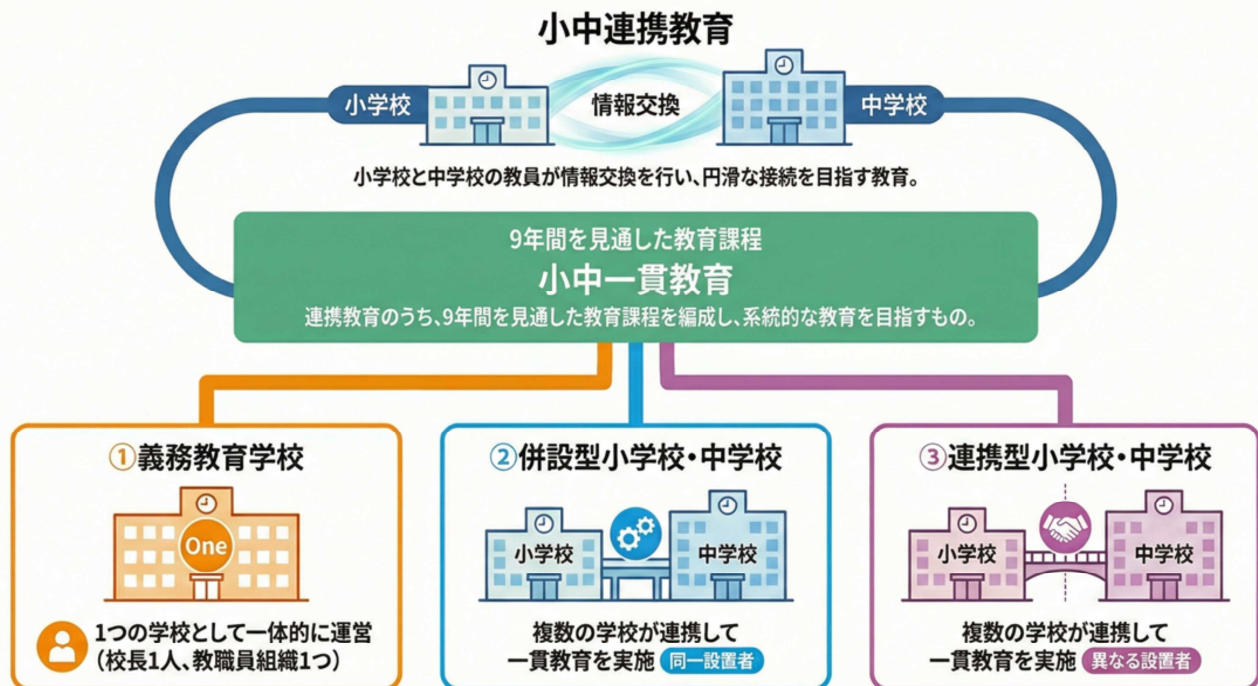
- デメリット

工事費が非常に高額になります。通学距離の増大に対する広域的な支援が必要です。

■【D案(小中統合)】

- ・建設費は約31億7,000万円を想定しています。
- ・併設型の小中一貫教育が可能となります。
- ・9年間を通じた継続的な教育の充実が期待されます。
- ・費用負担が大きく、また、広域にわたって通学支援体制の整備が不可欠です。

小中一貫教育について



15

■【小中一貫教育】

- ・小中一貫教育は、いわゆる「中1ギャップ」の緩和、また、小学校と中学校の連携により、9年間を見通した計画的・系統的な教育を目指すものです。
- ・D案は、②併設型小学校・中学校を想定しています。
- ・A案、B案、C案でも、施設分離型小学校・中学校による小中一貫教育を想定しています。
- ・併設型、分離型どちらにせよ、すべての中学校区において小中一貫教育を目指していくこととなります。

通学手段と支援について

方針: 小学校おおむね4km以上、中学校6km以上でスクールバスまたはタクシー等を利用。

統合パターン (北小を例にすると)	概算コスト例(年)
西小へ統合	小型バス1台(約876万円)
東小へ統合	大型バス1台(約1,156万円)
稲枝中へ統合	小型バス1台(約848万円)



登下校の安全確保を最優先に考えていくことになります。

■【通学支援(スクールバス等の利用)】

- ・通学の安全確保は最優先事項です。
- ・通学距離がおおむね4km以上となる場合に、スクールバス等による通学支援を想定しています。
- ・仮の試算では、北小を東小へ統合する場合、年間約1,156万円を見込んでいます。
- ・支援対象の範囲や方法は今後の検討課題です。

■【まとめ】

- ・この資料での説明は以上になります。
- ・子どもの数の減少は、日本全国、彦根市全体の問題であり、いずれはどこの地域でも直面する課題です。
- ・稲枝学区では、「現状をふまえて、よりよい教育環

境は何か」を先んじて考える好機となっています。

・先ほど示した統合した場合の4つのパターンは、今後の検討にあたっての「たたき台」となります。

・みなさんからの不安や期待を聞かせてもらうことが、この議論を進める力となります。

★稲枝学区の子どもたちの未来と一緒に考えていきましょう！